

カワセグループ^o
育児・介護休業規定

2025 年 4 月 1 日

カワセグループ

育児・介護休業規定

(目的)

第1条 この規定は、カワセグループ（株式会社グリーンパッケージ、株式会社グリーンロジスティックス及び株式会社川瀬商店、以下「会社」という）の各職種の就業規則の規定に基づき、従業員の育児・介護休業、子の看護等休暇、育児のための所定外労働の制限、育児・介護のための時間外労働及び深夜勤務の制限並びに育児・介護短時間勤務等の事項に関する取扱いについて定める。

(育児休業の対象者)

- 第2条 1) 育児のために休業することを希望する従業員（日雇従業員を除く）であって、1歳に満たない子と同居し、養育する者は、この規則に定めるところにより育児休業をすることができる。ただし、有期契約従業員にあっては、申出時点において、子が1歳6か月（本条第6項又は第7項の申出にあっては2歳）に達する日までに労働契約期間が満了し、更新されないことが明らかでない者に限り育児休業をすることができる。
- 2) 本条第1項、第3項から第7項にかかわらず、労使協定により除外された次の従業員からの休業の申出は拒むことができる。
- ① 入社1年未満の従業員
 - ② 申出の日から1年（本条第4項から第7項の申出にあっては6か月）以内に雇用関係が終了することが明らかな従業員
 - ③ 週間の所定労働日数が2日以下の従業員
- 3) 配偶者が従業員と同じ日から又は従業員より先に育児休業をしている場合、従業員は、子が1歳2か月に達するまでの間で、出生日以降の産前・産後休業期間と育児休業期間と出生時育児休業期間の合計が1年以内の範囲で育児休業をすることができる。
- 4) 次のいずれにも該当する従業員は、子が1歳6か月に達するまでの間で必要な日数について育児休業をすることができる。なお、育児休業を開始しようとする日は、原則として、子の1歳の誕生日に限るものとする。ただし、配偶者が育児・介護休業法第5条第3項（本項）に基づく休業を子の1歳の誕生日から開始する場合は、配偶者の育児休業終了予定日の翌日以前の日を開始日とすることができる。
- ① 従業員又は配偶者が原則として子の1歳の誕生日の前日に育児休業をしていること
 - ② 次のいずれかの事情があること
 - ア) 保育所に入所を希望しているが、入所できない場合
 - イ) 従業員の配偶者であって育児休業の対象となる子の親であり、1歳以降育児に当たる予定であった者が、死亡、負傷、疾病等の事情により、子を養育することが困難になった場合
- 5) 前項にかかわらず、産前・産後休業、出生時育児休業、介護休業又は新たな育児休業が始まったことにより本条第1項に基づく休業（配偶者の死亡等特別な事情による3回目以降の休業を含む）が終了し、終了事由である産前・産後休業等に係る子又は介護休業に係る対象家族が死亡等した従業員は、子が1歳6か月に達するまでの間で必要な日数について育児休業をすることができる。
- 6) 次のいずれにも該当する従業員は、子が2歳に達するまでの間で必要な日数について育児休業をすることができる。なお、育児休業を開始しようとする日は、子の1歳6か月の誕生日応当日に限るものとする。ただし、配偶者が育児・介護休業法第5条第4項（本項）に基づく休業を子の1歳6か月の誕生日応当日から開始する場合は、配偶者の育児休業

終了予定日の翌日以前の日を開始日とすることができる。

- ① 従業員又は配偶者が原則として子の1歳6か月の誕生日応当日の前日に育児休業をしていること
 - ② 次のいずれかの事情があること
 - ア) 保育所に入所を希望しているが、入所できない場合
 - イ) 従業員の配偶者であって育児休業の対象となる子の親であり、1歳以降育児に当たる予定であった者が、死亡、負傷、疾病等の事情により、子を養育することが困難になった場合
 - ③ 子の1歳6か月の誕生日応当日以降に本項の休業をしたことがないこと
- 7) 前項にかかわらず、産前・産後休業、出生時育児休業又は新たな育児休業が始まったことにより 本条第4項又は第5項に基づく育児休業(再度の休業を含む)が終了又は介護休業が始まったことにより本条第4項又は第5項に基づく育児休業(再度の休業を含む)が終了し、終了事由である産前・産後休業等に係る子又は介護休業に係る対象家族が死亡等した従業員は、子が2歳に達するまでの間に必要な日数について育児休業をすることができる。

(育児休業の申し出の手続等)

- 第3条 1) 育児休業をすることを希望する従業員は、原則として育児休業を開始しようとする日(以下「育児休業開始予定日」という)の1か月前(第2条第4項から第7項)に基づく1歳及び1歳6か月を超える休業の場合は、2週間前)までに育児休業申出書を会社に提出することにより申し出るものとする。なお、育児休業中の有期 契約従業員が労働契約を更新するに当たり、引き続き休業を希望する場合には、更新された労働契約期間の初日を育児休業開始予定日として、育児休業申出書により再度の申出を行うものとする。
- 2) 第2条第1項に基づく休業の申出は、次のいずれかに該当する場合を除き、一子につき2回限りとする。
- ① 第2条第1項に基づく休業をした者が本条第1項に基づく休業の申出をしようとする場合
 - ② 配偶者の死亡等特別の事情がある場合
- 3) 第2条第4項又は第5項に基づく休業の申出は、次のいずれかに該当する場合を除き、一子につき1回限りとする。
- ① 第2条第4項又は第5項に基づく休業をした者が本条第1項後段の申出をしようとする場合
 - ② 産前・産後休業、出生時育児休業、介護休業又は新たな育児休業が始まったことにより第2条第4項又は第5項に基づく育児休業が終了したが、終了事由である産前・産後休業等に係る子又は介護休業に係る対象家族が死亡等した場合
- 4) 第2条第6項又は第7項に基づく休業の申出は、次のいずれかに該当する場合を除き、一子につき1回限りとする。
- ① 第2条第6項又は第7項に基づく休業をした者が本条第1項後段の申出をしようとする場合
 - ② 産前・産後休業、出生時育児休業、介護休業又は新たな育児休業が始まったことにより第2条第6項又は第7項に基づく育児休業が終了したが、終了事由である産前・産後休業等に係る子又は介護休業に係る対象家族が死亡等した場合
- 5) 会社は育児休業申出書を受け取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求めることがある。

- 6) 育児休業申出書が提出されたときは、会社は速やかに当該育児休業申出書を提出した者（以下「申出者」という）に対し、育児休業取扱通知書を交付する。
- 7) 申し出の日後に申し出に係わる子が出生したときは、育休申出者は、出生後2週間以内に会社に育児休業対象児出生届を提出しなければならない。

（育児休業の申出の撤回等）

- 第4条
- 1) 育休申出者は、育児休業開始予定日の前日までは、育児休業撤回届を会社に提出することにより、育児休業の申し出を撤回することができる。
 - 2) 育児休業申出撤回届が提出されたときは、会社は速やかに当該育児休業撤回届を提出した者に対し、育児休業取扱通知書を交付する。
 - 3) 第2条第1項に基づく休業の申出の撤回は、撤回1回につき1回休業したものとみなす。第2条第4項又は第5項及び第6項又は第7項に基づく休業の申出を撤回した者は、特別の事情がない限り、同一の子については再度申出をすることができない。ただし、第2条第1項に基づく休業の申出を撤回した者であっても、同条第4項又は第5項及び第6項又は第7項に基づく休業の申出をすることができ、第2条第4項又は第5項に基づく休業の申出をすることができ、第2条第4項又は第5項に基づく休業の申出を撤回した者であっても、同条第6項又は第7項に基づく休業の申出をすることができ。
 - 4) 育児休業開始予定日の前日までに、子の死亡等により育休申出者が休業申出に係る子を養育しないこととなった場合には、育児休業の申出はされなかったものとみなす。この場合において、育休申出者は原則として当該事由が発生した日に会社にその旨を通知しなければならない。

（育児休業の期間等）

- 第5条
- 1) 育児休業の期間は、原則として子が1歳に達するまで（第2条第3項から第7項に基づく休業の場合は、それぞれ定められた時期まで）を限度として育児休業申出書に記載された期間とする。
 - 2) 本条第1項にかかわらず、会社は、育児・介護休業等に関する法律（以下「育児・介護休業法」という）の定めるところにより育児休業開始予定日の指定を行なうことができる。
 - 3) 従業員は、育児休業期間変更申出書により会社に育児休業開始予定日の1週間前までに申し出ることにより、育児休業開始予定日の繰上げ変更を、又、育児休業を終了しようとする日（以下「育児休業終了予定日」という）の1か月前（第2条第4項から第7項に基づく休業をしている場合は、2週間前）までに申し出ることにより、育児休業終了予定日の繰下げ変更を行うことができる。
育児休業開始予定日の繰上げ変更及び育児休業終了予定日の繰下げ変更とも、原則として第2条第1項に基づく休業1回につき1回に限り行うことができるが、第2条第4項から第7項に基づく休業の場合には、第2条第1項に基づく休業とは別に、子が1歳から1歳6か月に達するまで及び1歳6か月から2歳に達するまでの期間内で、それぞれ1回、育児休業終了予定日の繰り下げ変更を行うことができる。
 - 4) 育児休業期間変更申出書が提出されたときは、会社は速やかに当該育児休業期間変更申出書を提出した者に対し、育児休業取扱通知書を交付する。
 - 5) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、育児休業は終了するものとし、当該育児休業の終了日は当該各号に掲げる日とする。
 - ① 子の死亡等育児休業に係わる子を養育しないこととなった場合
当該事由が発生した日（なお、この場合において本人が出勤する日は、事由発生の日か

ら2週間以内であって、会社と本人が話し合いの上決定した日とする)

- ② 育児休業に係わる子が1歳に達した場合等
子が1歳に達した日(第2条第3項に基づく休業の場合を除く。第2条第4項又は第5項に基づく休業の場合は、子が1歳6か月に達した日。第2条第6項又は第7項に基づく休業の場合は、子が2歳に達した日)
 - ③ 育休申出者について、産前産後休業、介護休業又は新たな育児休業期間が始まった場合
産前産後休業、介護休業又は育児休業の開始日の前日
 - ④ 第2条第3項に基づく休業において、誕生日以降の産前・産後休業期間と育児休業(出産時育児休業含む)期間との合計が1年に達した場合
当該1年に達した日
- 6) 本条第5項第1号の事由が生じた場合には、育休申出者は原則として当該事由が生じた日に会社にその旨を通知しなければならない。

(出生時育児休業の対象者)

- 第6条 1) 育児のために休業することを希望する従業員(日雇従業員を除く)であって、産後休業をしておらず、子の誕生日又は出産予定日のいずれか遅い方から8週間以内の子と同居し、養育する者は、この規則に定めるところにより出生時育児休業をすることができる。
ただし、有期契約従業員にあつては、申出時点において、子の誕生日又は出産予定日のいずれか遅い方から8週間を経過する日の翌日から6か月を経過する日までに労働契約期間が満了し、更新されないことが明らかでない者に限り、出生時育児休業をすることができる。
- 2) 前項にかかわらず、労使協定により除外された次の従業員からの休業の申出は拒むことができる。
- ① 入社1年未満の従業員
 - ② 申出の日から8週間以内に雇用関係が終了することが明らかな従業員
 - ③ 1週間の所定労働日数が2日以下の従業員

(出生時育児休業の申出の手続等)

- 第7条 1) 出生時育児休業をすることを希望する従業員は、原則として出生時育児休業を開始しようとする日(以下、「出生時育児休業開始予定日」という)の2週間前までに出生時育児休業申出書を会社に提出することにより申し出るものとする。なお、出生時育児休業中の有期契約従業員が労働契約を更新するに当たり、引き続き休業を希望する場合には、更新された労働契約期間の初日を出生時育児休業開始予定日として、出生時育児休業申出書により再度の申出を行うものとする。
- 2) 第6条第1項に基づく休業の申出は、一子につき2回まで分割できる。ただし、2回に分割する場合は2回分まとめて申し出ることとし、まとめて申し出なかった場合は後の申出を拒む場合がある。
- 3) 会社は、出生時育児休業申出書を受け取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求めることがある。
- 4) 出生時育児休業申出書が提出されたときは、会社は速やかに当該出生時育児休業申出書を提出した者(以下この章において「出生時育休申出者」という)に対し、出生時育児休業取扱通知書を交付する。
- 5) 申出の日後に申出に係る子が出生したときは、出生時育休申出者は、出生後2週間以内に会社に出生時育児休業対象児出生届を提出しなければならない。

(出生時育児休業の申出の撤回等)

- 第8条 1) 出生時育児休業申出者は、出生時育児休業開始予定日の前日までは、出生時育児休業申出撤回届を会社に提出することにより、出生時育児休業の申出を撤回することができる。
- 2) 出生時育児休業申出撤回届が提出されたときは、会社は速やかに当該出生時育児休業申出撤回届を提出した者に対し、出生時育児休業取扱通知書を交付する。
- 3) 第6条第1項に基づく休業の申出の撤回は、撤回1回につき1回休業したものとみなし、みなし含め2回休業した場合は同一の子について再度申出をすることができない。
- 4) 出生時育児休業開始予定日の前日までに、子の死亡等により出生時育児休業申出者が休業申出に係る子を養育しないこととなった場合には、出生時育児休業の申出はされなかったものとみなす。この場合において、出生時育児休業申出者は、原則として当該事由が発生した日に、会社にその旨を通知しなければならない。

(出生時育児休業の期間等)

- 第9条 1) 出生時育児休業の期間は、原則として、子の出生後8週間以内のうち4週間(28日)を限度として出生時育児休業申出書に記載された期間とする。
- 2) 本条第1項にかかわらず、会社は、育児・介護休業法の定めるところにより出生時育児休業開始予定日の指定を行うことができる。
- 3) 従業員は、出生時育児休業期間変更申出書により会社に出生時育児休業開始予定日の1週間前までに申し出ることにより、出生時育児休業開始予定日の繰り上げ変更を休業1回につき1回、また、出生時育児休業を終了しようとする日(以下「出生時育児休業終了予定日」という)の2週間前までに申し出ることにより、出生時育児休業終了予定日の繰り下げ変更を休業1回につき1回行うことができる。
- 4) 出生時育児休業期間変更申出書が提出されたときは、会社は速やかに当該出生時育児休業期間変更申出書を提出した者に対し、出生時育児休業取扱通知書を交付する。
- 5) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、出生時育児休業は終了するものとし、当該出生時育児休業の終了日は当該各号に掲げる日とする。
- ① 子の死亡等出生時育児休業に係る子を養育しないこととなった場合
当該事由が発生した日(なお、この場合において本人が出勤する日は、事由発生の日から2週間以内であって、会社と本人が話し合いの上決定した日とする)
 - ② 子の出生日の翌日又は出産予定日の翌日のいずれか遅い方から8週間を経過した場合
子の出生日の翌日又は出産予定日の翌日のいずれか遅い方から8週間を経過した日
 - ③ 子の出生日(出産予定日後に出生した場合は、出産予定日)以後に出生時育児休業の日数が28日に達した場合
子の出生日(出産予定日後に出生した場合は、出産予定日)以後に出生時育児休業の日数が28日に達した日
 - ④ 出生時育児休業申出者について、産前・産後休業、育児休業、介護休業又は新たな出生時育児休業期間が始まった場合
産前・産後休業、育児休業、介護休業又は新たな出生時育児休業の開始日の前日
- 6) 本条第5項第1号の事由が生じた場合には、出生時育児休業申出者は原則として当該事由が生じた日に会社にその旨を通知しなければならない。

(出生時育児休業中の就業)

- 第9条の2 1) 出生時育児休業中に就業することを希望する従業員は、出生時育児休業中の就業可能日等申出書を休業開始予定日の1週間前までに会社に提出すること。なお、1週間を切

っても休業前日までは提出を受け付ける。

- 2) 会社は、前項の申出があった場合は、申出の範囲内の就業日等を申出書を提出した従業員に対して提示する。就業日がない場合もその旨通知する。従業員は提示された就業日等について、出生時育児休業中の就業日等の同意・不同意書を会社に提出すること。休業前日までに同意した場合に限り、休業中に就業することができる。会社と従業員の双方が就業日等に合意したときは、会社は速やかに出生時育児休業中の就業日等通知書を交付する。
- 3) 出生時育児休業中の就業上限は、次のとおりとする。
 - ① 就業日数の合計は、出生時育児休業期間の所定労働日数の半分以下（1日未満の端数切り捨て）
 - ② 就業日の労働時間の合計は、出生時育児休業期間の所定労働時間の合計の半分以下
 - ③ 出生時育児休業開始予定日又は出生時育児休業終了予定日に就業する場合は、当該日の所定労働時間数に満たない時間
- 4) 本条第1項の申出を変更する場合は出生時育児休業中の就業可能日等変更申出書を撤回する場合は出生時育児休業中の就業可能日等申出撤回届を休業前日までに会社に提出すること。就業可能日等申出撤回届が提出された場合は、会社は速やかに申出が撤回されたことを通知する。
- 5) 本条第2項で同意した就業日等を全部又は一部撤回する場合は、出生時育児休業中の就業日等撤回届を休業前日までに会社に提出すること。出生時育児休業開始後は、次に該当する場合に限り、同意した就業日等の全部又は一部を撤回することができる。出生時育児休業中の就業日等撤回届が提出されたときは、会社は速やかに出生時育児休業中の就業日等通知書を交付する。
 - ① 出生時育児休業申出に係る子の親である配偶者の死亡
 - ② 配偶者が負傷、疾病又は身体上若しくは精神上の障害その他これらに準ずる心身の状況により 出生時育児休業申出に係る子を養育することが困難な状態になったこと
 - ③ 婚姻の解消その他の事情により配偶者が出生時育児休業申出に係る子と同居しないこととなったこと
 - ④ 出生時育児休業申出に係る子が負傷、疾病又は身体上若しくは精神上の障害その他これらに準ずる心身の状況により、2週間以上の期間にわたり世話を必要とする状態になったとき

（介護休業の対象者）

- 第10条 1) 要介護状態にある家族を介護する従業員（日雇従業員を除く）は、この規則に定めるところにより介護休業をすることができる。ただし、有期契約従業員にあっては、申出時点において、介護休業を開始しようとする日（以下、「介護休業開始予定日」という。）から93日経過日から6か月を経過する日までに労働契約期間が満了し、更新されないことが明らかでない者に限り介護休業をすることができる。
- 2) 本条第1項にかかわらず、労使協定により除外された次の従業員からの休業の申出は拒むことができる。
- ① 入社1年未満の従業員
 - ② 申出の日から93日以内に雇用関係が終了することが明らかな従業員
 - ③ 1週間の所定労働日数が2日以下の従業員
- この要介護状態にある家族とは、負傷、疾病又は身体若しくは精神上の障害により、2週間以上の期間にわたり常時介護を必要とする状態にあり、次に該当する者をいう。
- ① 配偶者
 - ② 父母
 - ③ 子

- ④ 配偶者の父母
- ⑤ 祖父母、兄弟姉妹又は孫
- ⑥ 上記以外の家族で会社の認めた者

(介護休業の申し出の手続き等)

- 第 11 条 1) 介護休業をすることを希望する従業員は、原則として介護休業開始予定日の 2 週間前までに、介護休業申出書を会社に提出するものとする。なお、介護休業中の有期契約従業員が労働契約を更新するに当たり、引き続き休業を希望する場合には、更新された労働契約期間の初日を介護休業開始予定日として、介護休業申出書により再度の申出を行うものとする。
- 2) 申出は、対象家族 1 人につき 3 回までとする。ただし、本条第 1 項の後段の申出をしようとする場合にあっては、この限りでない。
- 3) 会社は介護休業申出書を受け取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求めることがある。
- 4) 介護休業申出書が提出されたときは、会社は速やかに当該介護休業申出書を提出した者（以下「申出者」という）に対し、介護休業取扱通知書を交付する。

(介護休業の申出の撤回等)

- 第 12 条 1) 申出者は、介護休業開始予定日の前日までは、介護休業撤回届を会社へ提出することにより、介護休業の申出を撤回することができる。
- 2) 介護休業申出書撤回届が提出されたときは、会社は速やかに該当介護休業申出撤回届を提出した者に対し、介護休業取扱通知書を交付する。
- 3) 同一対象家族について 2 回連続して介護休業の申出を撤回した者について、当該家族について再度の申出はすることができない。ただし、会社がこれを適当と認めた場合には、申し出ることができるものとする。
- 4) 介護休業開始予定日の前日までに、申し出に係る家族の死亡等により申出者が家族を介護しないこととなった場合には、介護休業の申出はされなかったものとみなす。この場合において、申出者は原則として当該事由が発生した日に会社にその旨を通知しなければならない。

(介護休業の期間等)

- 第 13 条 1) 介護休業の期間は、対象家族 1 人につき、原則として、通算 93 日間の範囲（介護休業開始予定日から起算して 93 日を経過する日までをいう）内で、介護休業申出書に記載された期間とする。
- 2) 第 1 項にかかわらず、会社は育児・介護休業法の定めるところにより、介護休業開始予定日の指定を行なうことができる。
- 3) 従業員は、介護休業期間変更申出書により、介護休業を終了しようとする日（以下「休業終了予定日」という）の 2 週間前までに会社に申し出ることにより、介護休業終了予定日の繰下げ変更を行なうことができる。この場合において、介護休業開始予定日から変更後の介護休業終了予定日までの期間は通算 93 日の範囲を越えないことを原則とする。
- 4) 従業員より介護休業期間変更申出書が提出されるときは、会社は速やかに当該介護休業申出書を提出した者（以下この章において「申出者」という）に対し、介護休業取扱通知書を交付する。
- 5) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、介護休業は終了するものとし、当該

介護休業の終了日は当該各号に掲げる日とする。

- ① 家族の死亡等介護休業に係る家族を介護しないこととなった場合
当該事由が発生した日（なお、この場合において本人が出勤する日は、事由発生の日から2週間以内であって、本人と会社が話し合いの上決定した日とする。）
 - ② 申出者について、産前産後休業、育児休業又は新たな介護休業が始まった場合
産前産後休業、育児休業又は新たな介護休業の開始日の前日
- 6) 第5項第1号の事由が生じた場合には、申出者は原則として当該事由が生じた日に会社にその旨を通知しなければならない。

（子の看護等休暇）

第14条 1) 小学校第3学年修了までの子を養育する従業員（日雇従業員を除く）は、以下に該当する場合は、就業規則に規定する年次有給休暇とは別に、当該子が1人の場合は1年間につき5日、2人以上の場合は1年間につき10日を限度として、子の看護等休暇を取得することができる。

- ① 負傷し、又は疾病にかかった当該子の世話をするため
- ② 当該子に予防接種や健康診断を受けさせるため
- ③ 感染症に伴う学級閉鎖等による子の世話をするため
- ④ 入園（入学）式、卒園（卒業）式に出席するため

この場合の1年間とは、4月1日から翌年3月31日までの期間とする。

ただし、事業主は労使協定によって除外された、1週間の所定労働日数が2日以下の従業員からの子の看護等休暇の申出は拒むことができる。

ただし、看護等休暇期間中は無給とする。

- 2) 子の看護等休暇は、時間単位で始業時刻から連続又は終業時刻まで連続して取得することができる。
- 3) 取得しようとする者は、原則として、子の看護等休暇申出書を事前に会社に申し出るものとする。
- 4) 本制度の適用を受ける間の給与については、無給とする。
- 5) 賞与については、その算定対象期間に本制度の適用を受ける期間がある場合においては、労務提供のなかった時間に対応する賞与は支給しない。
- 6) 定期昇給及び退職金の算定に当たっては、本制度の適用を受ける期間を通常の勤務をしているものとみなす。

（介護休暇）

第15条 1) 要介護状態にある家族の介護その他の世話をする従業員（日雇従業員を除く）は、就業規則に規定する年次有給休暇とは別に、当該家族が1人の場合は1年間につき5日、2人以上の場合は1年間につき10日を限度として、介護休暇を取得することができる。

この場合の1年間とは、4月1日から翌年3月31日までの期間とする。

ただし、事業主は労使協定によって除外された、1週間の所定労働日数が2日以下の従業員からの介護休暇の申出は拒むことができる。

- 2) 介護休暇は、時間単位で始業時刻から連続又は終業時刻まで連続して取得することができる
- 3) 本制度適用期間は無給とする。
- 4) 介護休暇を取得しようとする者は、原則として事前に会社に申し出るものとする。
- 5) 賞与については、その算定対象期間に本制度の適用を受ける期間がある場合においては、労務提供のなかった時間に対応する賞与は支給しない。
- 6) 定期昇給及び退職金の算定に当たっては、本制度の適用を受ける期間は通常の勤務をしたものとみなす。

(育児・介護のための所定外労働の制限)

- 第 16 条 1) 小学校就学前の子を養育する従業員（日雇従業員を除く）が当該子を養育するため、又は要介護状態にある家族を介護する従業員（日雇従業員を除く）が当該家族を介護するために申し出た場合には、事業の正常な運営に支障がある場合を除き、所定労働時間を超えて労働させることはできない。
- 2) 本条第 1 項にかかわらず、労使協定によって除外された次の従業員からの所定外労働の制限の請求は拒むことができる。
- ① 入社 1 年未満の従業員
 - ② 1 週間の所定労働日数が 2 日以下の従業員
- 3) 請求をしようとする者は、1 回につき、1 か月以上 1 年以内の期間（以下、本条において「制限期間」という）について、制限を開始しようとする日（以下、本条において「制限開始予定日」という）及び制限を終了しようとする日を明らかにして、原則として、制限開始予定日の 1 か月前までに、育児・介護のための所定外労働制限申出書を会社に提出するものとする。この場合において、制限期間は、次条第 3 項に規定する制限期間と重複しないようにしなければならない。
- 4) 会社は、所定外労働制限申出書を受取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求めることがある。
- 5) 請求の日後に請求に係る子が出生したときは、所定外労働制限申出書を提出した者（以下、本条において「請求者」という）は、出生後 2 週間以内に会社に所定外労働制限対象児出生届を提出しなければならない。
- 6) 制限開始予定日の前日までに、請求に係る子又は家族の死亡等により請求者が子を養育又は家族を介護しないこととなった場合には、請求されなかったものとみなす。
この場合において、請求者は、原則として当該事由が発生した日に、会社にその旨を通知しなければならない。
- 7) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、制限期間は終了するものとし、当該制限期間の終了日は該当各号に掲げる日とする。
- ① 子又は家族の死亡等により制限に係る子を養育又は家族を介護しないこととなった場合
該当事由が発生した日
 - ② 制限に係る子が小学校就学の始期に達した場合
6 歳に達する日の属する年度の 3 月 31 日に達した日
 - ③ 請求者について、産前産後休業、育児休業又は介護休業が始まった場合
産前産後休業、育児休業又は介護休業の開始日の前日
- 8) 第 6 項第 1 号の事由が生じた場合には、請求者は原則として当該事由が生じた日に、会社にその旨を通知しなければならない。

(育児・介護のための時間外労働の制限)

- 第 17 条 1) 小学校就学の始期に達するまでの子を養育する従業員が当該子を養育するため又は要介護状態にある家族を介護する従業員が当該家族を介護するために請求した場合には、就業規則の規定及び時間外労働に関する協定にかかわらず、事業の正常な運営に支障がある場合を除き、1 か月について 24 時間、1 年について 150 時間を超えて時間外労働をさせてはならない。
- 2) 本条第 1 項にかかわらず、次の①から③のいずれかに該当する従業員からの時間外労働の制限の請求は拒むことができる。

- ① 日雇従業員
 - ② 入社1年未満の従業員
 - ③ 1週間の所定労働時間日数が2日以下の従業員
- 3) 請求をしようとする者は、1回につき、1か月以上1年以内の期間（以下、本条において「制限期間」という）について、制限を開始しようとする日（以下、本条において「制限開始予定日」という）及び制限を終了しようとする日を明らかにして、原則として、制限開始予定日の1か月前までに育児・介護のための時間外労働制限申出書を会社に提出するものとする。この場合において、制限期間は、前条第2項に規定する制限期間と重複しないようにしなければならない。
- 4) 会社は時間外労働制限申出書を受取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求められることがある。
- 5) 請求の日後に請求に係る子が出生したときは、時間外労働制限申出書を提出した者（以下、本条において「請求者」という）は、出生後2週間以内に会社に時間外労働制限対象児出生届を提出しなければならない。
- 6) 制限開始予定日の前日までに、請求に係る子又は家族の死亡等により請求者が子を養育又は家族を介護しないこととなった場合には、請求されなかったものとみなす。
この場合において、請求者は原則として当該事由が発生した日に、会社にその旨を通知しなければならない。
- 7) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、制限期間は終了するものとし、当該制限期間の終了日は該当各号に掲げる日とする。
- ① 子又は家族の死亡等制限に係る子を養育又は家族を介護しないこととなった場合
該当事由が発生した日
 - ② 制限に係る子が小学校就学の始期に達した場合
子が6歳に達する日の属する年度の3月31日
 - ③ 請求者について、産前・産後休業、育児休業、出生時育児休業又は介護休業が始まった場合
産前・産後休業、育児休業、出生時育児休業又は介護休業の開始日の前日
- 8) 本条第7項1号の事由が生じた場合には、請求者は原則として当該事由が生じた日に、会社にその旨を通知しなければならない。

（育児・介護のための深夜勤務の制限）

- 第18条 1) 小学校就学の始期に達するまでの子を養育する従業員が当該子を養育するため又は要介護状態にある家族を介護する従業員が該当家族を介護するために請求した場合には、就業規則の規定にかかわらず、事業の正常な運営に支障がある場合を除き、午後10時から午前5時までの間（以下、「深夜」という）に労働させることはできない。
- 2) 第1項にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する従業員からの深夜業の制限の請求は拒むことができる。
- ① 日雇従業員
 - ② 入社1年未満の従業員
 - ③ 請求に係る子又は家族の16歳以上の同居の家族が次のいずれにも該当する従業員
・深夜において就業していない者（1か月について深夜における就業が3日以下の者を含む）であること
・心身の状況が請求に係る子の保育又は家族の介護をすることができる者であること
・6週間（多胎妊娠の場合にあっては、14週間）以内に出産予定でなく、かつ産後

8週間以内でない者であること

- ④ 1週間の所定労働時間日数が2日以下の従業員
 - ⑤ 所定労働時間の全部が深夜にある従業員
- 3) 請求をしようとする者は、1回につき、1か月以上6か月以内の期間（以下、本条において「制限期間」という）について、制限を開始しようとする日（以下、本条において「制限開始予定日」という）及び制限を終了しようとする日を明らかにして、原則として、制限開始予定日の1か月前までに育児・介護のための深夜業制限申出書を会社に提出するものとする。
- 4) 会社は深夜業制限申出書を受取るに当たり、必要最小限度の各種証明書の提出を求めることがある。
- 5) 請求の日後に請求に係る子が出生したときは、深夜業制限申出書を提出した者（以下、本条において「請求者」という）は、出生後2週間以内に会社に深夜業制限対象児出生届を提出しなければならない。
- 6) 制限開始予定日の前日までに、請求に係る子又は家族の死亡等により請求者が子を養育又は家族を介護しないこととなった場合には、請求されなかったものとみなす。この場合において、請求者は原則として当該事由が発生した日に、会社にその旨を通知しなければならない。
- 7) 次の各号に掲げるいずれかの事由が生じた場合には、制限期間は終了するものとし、当該制限期間の終了日は該当各号に掲げる日とする。
- ① 子又は家族の死亡等制限に係る子を養育又は家族を介護しないこととなった場合
当該事由が発生した日
 - ② 制限に係る子が小学校就学の始期に達した場合子が6歳に達する日の属する年度の3月31日
 - ③ 請求者について、産前・産後休業、育児休業、出生時育児休業又は介護休業が始まった場合
産前・産後休業、育児休業、出生時育児休業又は介護休業の開始日の前日
- 8) 本条第7項第1号の事由が生じた場合には、請求者は原則として当該事由が生じた日に会社にその旨を通知しなければならない。
- 9) 制限期間中の給与については、別途定める賃金規定に基づく基本給を時間換算した額を基礎とした実労働時間分の基本給と諸手当の全額を支給する。
- 10) 深夜勤務の制限を受ける従業員に対して、会社は必要に応じて昼間勤務へ転換させることがある。

（育児短時間勤務）

- 第19条 1) 3歳に満たない子を養育する従業員は、子が3歳に達する月まで申し出ることにより、就業規則の規定の所定労働時間について、以下のように変更することができる。
- 所定労働時間を午前9時から午後4時まで（うち休憩時間は、午前12時から午後1時までの1時間とする）の6時間とする（1歳に満たない子を育てる女性従業員は更に別途30分ずつ2回の育児時間を請求できる）。
- 2) 本条第1項にかかわらず、次のいずれかに該当する従業員からの育児短時間勤務の申出は拒むことができる。
- ① 日雇従業員
 - ② 1日の所定労働時間が6時間以下である従業員
 - ③ 労使協定によって除外された次の従業員

ア) 入社1年未満の従業員

イ) 1週間の所定労働日数が2日以下の従業員

- 3) 申し出をしようとする者は、1回につき、1か月以上1年以内の期間について、短縮を開始しようとする日及び短縮を終了しようとする日を明らかにして、原則として、短縮開始予定日の1か月前までに育児短時間勤務申出書により会社に申し出なければならない。申出書が提出されたときは、会社は速やかに申出者に対し、育児短時間勤務取扱通知書を交付する。その他適用のための手続きについては、第3条から第5条までの規定（第3条第2項及び第4条第3項を除く）を準用する。
- 4) 本制度の適用を受ける間の給与については、原則として基本給及び諸手当を時間換算した額を基礎とした実労働時間分を支給する。
- 5) 賞与については、その算定対象期間に本制度の適用を受ける期間がある場合においては、短縮した時間に対応する賞与は支給しない。
- 6) 定期昇給及び退職金の算定に当たっては、本制度の適用を受ける期間は通常の勤務をしているものとみなす。

（介護短時間勤務）

第20条 1) 要介護状態にある家族を介護する従業員は、申し出ることにより、当該家族1人当たり利用開始の日から3年の間で2回までの範囲内で、就業規則の所定労働時間について、以下のように変更することができる。

所定労働時間を午前9時から午後4時まで（うち休憩時間は、午前12時から午後1時までの1時間とする）の6時間とする。

- 2) 本条第1項にかかわらず、次のいずれかに該当する従業員からの介護短時間勤務の申出は拒むことができる。

① 日雇従業員

② 労使協定によって除外された次の従業員

ア) 入社1年未満の従業員

イ) 1週間の所定労働日数が2日以下の従業員

- 3) 申し出をしようとする者は、短縮を開始しようとする日及び短縮を終了しようとする日を明らかにして、原則として、短縮開始予定日の2週間前までに、介護短時間勤務申出書により会社に申し出なければならない。申出書が提出されたときは、会社は速やかに申出者に対し、介護短時間勤務取扱通知書を交付する。その他適用のための手続等については、第11条から第13条までの規定を準用する。
- 4) 本制度の適用を受ける間の給与については、別途定める賃金規定に基づく基本給を時間換算した額を基礎とした実労働時間分の基本給と諸手当の全額を支給する。
- 5) 賞与については、その算定対象期間に本制度の適用を受ける期間がある場合においては、短縮した時間に対応する賞与は支給しない。
- 6) 定期昇給及び退職金の算定に当たっては、本制度の適用を受ける期間は通常の勤務をしているものとみなす。

（禁止行為）

第21条 すべての従業員は、他の従業員を業務遂行上の対等なパートナーとして認め、職場における健全な秩序ならびに協力関係を保持する義務を負うとともに、職場内において次の各号に掲げる行為をしてはならない。また、自社の従業員以外の者に対しても、これに類する行為を行ってはならない。

- ① 部下の育児・介護に関する制度や措置の利用等に関し、解雇その他不利益な取扱いを示唆する言動
- ② 部下又は同僚の育児・介護に関する制度や措置の利用を阻害する言動
- ③ 部下又は同僚が育児・介護に関する制度や措置を利用したことによる嫌がらせ等
- ④ 部下である従業員が1)～3)の行為を受けている事実を認めながら、これを黙認する上司の行為

(懲戒)

第22条 次の各号に掲げる場合に依じ、当該各号に定める懲戒処分を行う。

- ① 第21条の行為を行った場合
就業規則で定めるけん責、減給、出勤停止又は降格
- ② 前号の行為が再度に及んだ場合、その情状が悪質と認められる場合
就業規則に定める懲戒解雇

(相談及び苦情への対応)

- 第23条 1) 育児休業・介護休業等に関するハラスメントの相談窓口は本社総務部内に設けることとし、その責任者は総務部長とする。総務部長は、窓口担当者の名前を周知するとともに、担当者に対する対応マニュアルの作成及び対応に必要な研修を行うものとする。
- 2) 育児休業・介護休業等に関するハラスメントの被害者に限らず、すべての従業員は育児休業・介護休業等に関する就業環境を害する言動に関する相談を相談窓口の担当者に申し出ることができる。
- 3) 対応マニュアルに沿い、相談窓口担当者は相談者からの事実確認の後、総務部長へ報告し、報告に基づき、総務部長は相談者のプライバシーに配慮した上で、必要に応じて行為者、被害者、上司その他の従業員等に事実関係を聴取する。
- 4) 前項の聴取を求められた従業員は、正当な理由なくこれを拒むことはできない。
- 5) 総務部長は、問題解決のための措置として、第22条による懲戒の他、行為者の異動等被害者の労働条件及び就業環境を改善するために必要な措置を講じる。
- 6) 相談及び苦情への対応に当たっては、関係者のプライバシーは保護されるとともに、相談をしたこと又は事実関係の確認に協力したこと等を理由として不利益な取扱いを行わない。

(再発防止の義務)

第24条 総務部長は、育児休業・介護休業等に関するハラスメント事案が生じた時は、周知の再徹底及び研修の実施、事案発生の原因の分析と再発防止等、適切な再発防止策を講じなければならない。

(円滑な取得及び職場復帰支援)

第25条 会社は、従業員から本人又は配偶者が妊娠・出産等したこと又は本人が対象家族を介護していることの申出があった場合は、当該従業員に対して、円滑な休業取得及び職場復帰ならびに制度利用を支援するために、以下①、②の措置を実施する。また、育児休業及び出生時育児休業、介護休業及び介護両立支援制度等の申出が円滑に行われるようにするため、③の措置を実施する。

- ① 当該従業員に個別に育児休業に関する制度等（育児休業、出生時育児休業、パパ・ママ育休プラス、その他の両立支援制度、育児休業等の申出先、育児・介護休業給付に関する こと、休業期間中の社会保険料の取扱い、育児・介護休業中及び休業後の待遇や労働条件など）の周知及び制度利用の意向確認を実施する。
 - ② 当該従業員ごとに育休復帰支援プラン又は介護支援プランを作成し、同プランに基づく措置を実施する。なお、同プランに基づく措置は、業務の整理・引継ぎに係る支援、育児休業中又は介護休業中の職場に関する情報及び資料の提供など、育児休業又は介護休業等を取得する従業員との面談により把握したニーズに合わせて定め、これを実施する
 - ③ 従業員に対して育児休業（出生時育児休業含む）、介護休業及び介護両立支援制度等の相談窓口を設置する。
- 2) 会社は、従業員から本人又は配偶者が妊娠・出産等したことの申出があったとき、当該従業員に対して、仕事と育児の両立の支障となる個別の事情の改善に資する事項（勤務時間帯、勤務地、育児両立支援制度等と利用期間など）に関する意向の聴取を実施する。
 - 3) 会社は、従業員が 40 歳に達する日の属する年度において、当該従業員に対して、介護休業に関する制度（介護休業、その他の両立支援制度、介護休業等の申出先、介護休業給付に関する こと）について情報提供を実施する。

（復職後の勤務）

第 26 条 1) 育児・介護休業後の勤務は、原則として、休業直前の部署及び職務とする。

- 2) 本条第 1 項にかかわらず、本人の希望がある場合及び組織の変更等やむを得ない事情がある場合には、部署及び職務の変更を行うことがある。この場合は、育児休業終了予定日の 1 か月前、介護休業終了予定日の 2 週間前までに正式に決定し通知する。

（年次有給休暇）

第 27 条 年次有給休暇の権利発生のための出勤率の算定に当たっては、育児・介護休業をした日は、出勤したものとみなす。

（法令との関係）

第 28 条 育児・介護休業、子の看護等休暇、介護休暇、育児・介護のための所定外労働の制限、育児・介護のための時間外労働及び深夜業の制限並びに所定措置等に関して、この規定に定めのないことについては、育児・介護休業法その他の法令の定めるところによる。

（各書類の提出）

第 29 条 本規定に基づく書類の提出については、会社及び従業員双方の合意により省略することが出来る。

（附則）

本規則は、2025 年 4 月 1 日から適用する。